生活拠点としての中軽井沢の重み

蘇るふるさと、歩け！沓掛、浅間が見てる

国の人口推計によると、2040 年の軽井沢町の人口は 2,000 人余りの減少と予想されています。国民総人口が 1 億 700 万人余りまで落ち込む予想を前提とすれば、まだまだ元気のある自治体グループに入っていますが、入込客の動向いかんでは油断できません。

住民の4分の1が集中する中軽井沢エリアは生活者ゾーンとしての拠点性が顕著であり、他のエリアとは異なる生き残りの手法をさぐる必要がでてきます。役場、病院、学校、駅と図書館、郵便局、金融機関、商工会館や各種商業施設、日常的飲食店などなど…。

第一テーマの高原保養都市とは全く別の顔の地方都市の中心街、コンパクトシティのモデルでもあります。浅間山と湯川を拠り所にした生活者のための歩行・自転車生活圏をどうデザインするか。これを皆で勉強する未来研究センターとしての「22 世紀風土フォーラム」のテーマとして考察してみてはどうでしょうか。

国道より北の街区を流れている沓掛用水は、未来の中軽井沢を決める大事な資源です。網の目状にながれる水網広場は、ふるさと沓掛の新しい顔になります。

くつかけテラスを活かしたまちづくり ①

ゆったりとした歩道を備えた駅前の街路は中軽井沢を象徴するくつかけテラスの全貌を切り取ります。歩行者を主役とする駅前広場は、マーケットの開催場としても利用可能であり、商店街を活気づける起爆剤にもなりえます。こうしたスペースも備えたくつかけテラスの一角に「22 世紀風土フォーラム」の拠点を置き、様々な可能性を模索していきます。

くつかけのまち並みの展開 ②

見通しの良い芝生の帯が広がる街路は、くつかけテラスを焦点とするまち並みの主軸です。沿道のまち並みは、くつかけテラスを参照し地場材を使用しながら伝統様式の中にモダンなセンスで仕上げ、中軽井沢らしい風情を演出していきます。

駅周辺街区の活性化 ③

水路沿いに顔を向けるお店や、水路を活かした庭、水場を囲んだ溜まり場、テラスなど、宅地の合間を縫って流れる水路網により、中軽井沢は、歩いて楽しめる住宅地・商店街へと生まれ変わります。